第１０課　アメリカとバビロン

【暗唱聖句】

「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう。お前の民、あの書に記された人々は」ダニエル12:1

【今週のテーマ】

今週は黙示録13章に描かれているもう一つの獣としてあらわされているアメリアがどのように預言されているかについて学びます。

【日曜日・治った致命的な傷】

黙示録13章の中に海から上がってくる獣は、ローマ法王を預言しています。そのことがわかるように獣の活動期間や影響力など、いくつかの決定的な出来事について預言されています。

「この獣にはまた、大言と冒涜の言葉を吐く口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた」黙示録13:5

中世ヨーロッパにおいてローマ法王の持っていた力は一国の皇帝以上でした。それを表す有名な出来事の一つにカノッサの屈辱があります。これは1076年、神聖ローマ帝国の皇帝ハインリヒ4世と教皇グレゴリウス7世が、帝国の統治機構にも関わる聖職叙任権（司教や修道院長の任命権）の問題を巡って争ったとき、教皇はローマ帝国皇帝を破門にします。そのことによって民衆からの支持が失墜してしまいます。慌てた皇帝はローマ法王から許しを請うために、真冬の雪が降る寒いカノッサ城の前で3日間も待たされることになったのでした。これは法王の力が皇帝以上であったことを物語るエピソードとして知られています。しかし、聖書によればこの獣に力が与えられるのは四十二か月の間です。四十二か月とは1260日のことであり、1日を1年と解釈する預言の法則から1260年となるわけですが、これはローマ法王権が確立した538年からフランス革命によって時の法王であったピウス6世が捕らえられ、幽閉中に死亡し、ローマ法王が半年間も途絶えてしまう出来事を見事に預言したものでした。しかし、聖書の預言は次のように続くのです。

「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した」黙示録13:3

フランス革命は宗教を否定しましたが、しかし、やはり民衆の心は宗教を求めたのです。そのため一次途絶えた法王が再び選ばれます。これが「死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった」という言葉に預言されているわけです。そして、問題なのはその後に続く言葉です。聖書はこう予言しているのです。

「そこで、全地は驚いてこの獣に服従した」

【月曜日・預言の中のアメリカ合衆国】

多くの人は、黙示録13章に描かれているような力を再びローマ法王が持つことができるのだろうかと疑問を持ちます。しかし、今の様子を見ていると、少しずつ政治的な力を持ち始めていることはわかります。莫大な財力もあります。そして、黙示録が預言する驚くべきことは、この海（多くの群衆を表す）から上がってきた先の獣を、地から上がってくる別の獣であるアメリカが、支えるようになるのです。

「この獣は、先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に、致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた」黙示録13:12

地から上がってきた獣は、先の獣が持っていた権力を持つようになります。中世の時代に絶対的な権力を持っていたローマ法王権力に匹敵する力を今の時代に持っている国は、先の獣が死ぬほどの傷を受けた後、つまり1798年以降に台頭してくる国であり、他の国を圧倒する力を持った国となれば、もはやアメリカしかありません。

【火曜日・礼拝の問題】

偶像礼拝の問題は旧約時代の人々の間でも頻繁に見られ、国が衰退する原因を作っていきました。神様と私たちとの関係は夫婦の関係に例えることで、どれほど偶像礼拝を神様が悲しまれるのかを教えようとされましたが、民たちはなかなか耳を傾けようとはしませんでした。黙示録においても、この礼拝の問題が出てきます。

「第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた」黙示録13:15

ここに描かれている光景は、無理やり獣の像を拝ませようとすることです。拝もうとしないものは殺されると書かれてあります。これはダニエル書に描かれた金の像を拝まなかったために燃え盛る炉の中に投げ入れられた3人の青年と物語を想起させます。現代において、そのようなことが実際に起こりうるのでしょうか。かつて日本も天皇陛下を神として拝むように強要されました。真実の神様をただ単に拝ませないのではなく、拝ませないために別のものを拝ませようとする手法は同じであることがわかります。三天使の使命でもポイントになるのは礼拝です。真実の神、天地万物を創造された神様を礼拝することです。

大声で言った。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい。」黙示録14:7

いったい私達が何を拝んでいるのかが問題になるのです。第一天使は、創造主を拝むようにと大声で語っています。ということは逆に終末時代において創造主以外のものを多くの人が拝むようになることに対する警告なのです。第二天使は、こう続けました。

「また、別の第二の天使が続いて来て、こう言った。「倒れた。大バビロンが倒れた…」黙示録4:8

バビロンは常に偽りの礼拝の中心でした。バビロンの名の由来であるバベルの塔は、洪水から身を守るために作りました。これは自分で自分を救うために必死に生きる人の姿を象徴しています。そのような人はやがて倒れるときが来ます。神様は二度と洪水で地を滅ぼすことはしないと約束されたわけですから、自分で自分を救う人たちとは、神様のことを信じることができる自分を信じているのです。お金や地位や自分の能力を信じているのです。これは創造主なる神様以外のものを神様としていることと同じなのです。

【水曜日：大バビロン】

バビロンに対する予言的メッセージとして印象的なのは、そこから逃げよということです。

「お前たちはバビロンの中から逃げ、おのおの自分の命を救え。バビロンの悪のゆえに滅びるな」エレミヤ51:6

「シオンよ、逃げ去れ、バビロンの娘となって住み着いた者よ」ゼカリア2:11

真実の神様を礼拝することと、バビロンから逃げることは結果的に同じなのです。逃げるくらいの危機的な覚悟を持たなければ、真の礼拝者になるのが難しいほど、サタンの影響力は激しいということです。

「わたしはバビロンの高官、知者、総督、長官、勇士らを酔わせる。彼らはいつまでも眠り続けて目を覚ますことはない、とその御名を万軍の主という王が言われる」エレミヤ51:57

バビロンのもう一つの特徴は、眠らされているということです。正しい判断ができず、行動を起こすことができず、ぼーとしています。まるで熱くもなく、冷たくもなく生ぬるいラオディキア教会のようです。そこから私達は命がけで逃げ、そして真の礼拝へとたどり着く、このような目に見えない霊の戦いの中にいるのです。黙示録１７章から１８章にかけて、バビロンが滅ぼされていく光景が描かれています。

「さて、七つの鉢を持つ七人の天使の一人が来て、わたしに語りかけた。「ここへ来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きを見せよう…地上に住む人々は、この女のみだらな行いのぶどう酒に酔ってしまった」黙示録17：1,2

「わたしは、赤い獣にまたがっている一人の女を見た。この獣は、全身至るところ神を冒涜する数々の名で覆われており、七つの頭と十本の角があった」黙示録17：3

「その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である」黙示録17:5

大淫婦は直接的にはローマを表していますが、霊的な意味では淫婦は偶像崇拝の象徴であり、サタンとつながる宗教的、政治的な力を持っている何かです。人々を酔わせるように正しい判断ができないように麻痺させ、偶像崇拝に引き釣り込みます。そのような霊的な力が働いており、それは強力なのです。そして、この女の額には「大バビロン」「みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」と書かれています。バビロン的生き方へと誘い込み、次々に子どもを生むようにその数を増やしていく様を予言しています。

【木曜日：わたしの民よ、彼女から離れ去れ】

「天使は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた忌まわしい獣の巣窟となった」黙示録18:2

ここに、黙示録14：8に描かれている「バビロンが倒れた」という予言が成就します。どれほど巨大に力を持っていようと、神様の前には無力で、最後に必ず倒れるのです。天使は最後の警告を与えます。

わたしはまた、天から別の声がこう言うのを聞いた。「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ」黙示録18:4

何度も繰り返し逃れよとの聖書のメッセージは明確であり、疑いの余地がありません。しかし、まるで酔っている人のように、判断力が鈍り、素早い行動ができないと、逃れることができず、巻き込まれていく恐れがあります。キリストは「目を冷ましていなさい」と繰り返し語ります。目を覚ますとは、結局の所バビロンから離れて、真実の神様とともに生きるということなのです。